

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



25

よろこびの知らせ
第25集

目 次

創造の六日間	1
創世記 1:1-5	
人とは何者なのでしょう	10
創世記 2:4-9	
そよ風の吹くころ	19
創世記 3:8-12	
福音のはじめ	28
創世記 3:13-15	

ここに収められたメッセージは、2021年10月にテキサス州
プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたも
のです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

創造の六日間

創世記 1:1-5

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

1:2 地は形がなく、何もなかった。やみがたいなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。

1:3 そのとき、神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。

1:4 神はその光をよしと見られた。そして神はこの光とやみとを区別された。

1:5 神は、この光を昼と名づけ、このやみを夜と名づけられた。こうして夕があり、朝があった。第一日。

世界には「神」と呼ばれるものが限りなくあります。それらは「神」とは呼ばれても、ほんとうの神ではありません。それで、私たちは、まことの神を「聖書の神」と呼んで区別します。聖書は「神の言葉」、神が私たちに語りかけてくださっている言葉、また、神について語っている言葉です。つまり、聖書は、神が、ご自分でご自分をことを語っておられるもの、神の「自己紹介」の書です。まことの神を知るのに、聖書以上に確かなものはどこにもありません。

一、永遠の神

では、神は、聖書で、ご自分をどのようなお方であると言っておられるのでしょうか。神は、まず、ご自分を「永遠の神」である言っておられます。

「初めに、神が天と地を創造した。」これは、神が世界を造られたお方、「創造者」であることを教えていま

すが、同時に、神が世界が造られる以前の「初め」から、神が存在しておられたことを教えています。

この世界がどのように形造られているか、そこにどのような法則があり、生命体はどのように活動しているのか、それは、科学者たちが研究し、数式や化学式で表そうとしていることです。しかし、古代の人々ばかりでなく、現代の私たちも、そうした数式で世界の創造を示されたとしても、それが何を意味するのか、自分にとってどんな意義があるのかを理解することができません。それで聖書は、誰もが理解でき、人の心に語りかける言葉で、私たちが今、目にしているすべてのものを創造されたのは神であると語っているのです。

聖書の創造の記述は世界の各地にある「創造神話」のひとつであると、多く的人是は考えています。しかし、聖書の記述は、そうした神話とは根本的に違っています。どの神話でも、世界ははじめから存在しており、神々といえども世界の一部です。それらの神話は、世界の「創造」というよりは、世界がどのように形造られたかを語るもので、「創造神話」というよりは「形成神話」といったほうがよいものです。たとえば、バビロニアの神話では、神々の間で争いが起こり、神々は、マルドゥークという戦いの神に最高神の地位を与えた。マルドゥークは敵対する海の女神ティアマトに戦いを挑んで、彼女を滅ぼし、その死体を二つに裂いて、一つを「空」にし、もう一つを「陸」にした。また、ティアマトの部下の血から人類を生み出して神々のしもべにしたことが語

られています。聖書とは全く違う話で、神々は生まれたり、死んだりするもので永遠の神ではないのです。永遠の神と神による創造を教えるものは聖書の他ありません。

聖書は「初めに神…」と言って、神は、すべてのもの、時間や空間が存在する以前から存在しておられる「永遠の神」であることを告げています。創世記に「第1日」から「第7日」の「日」が数えられていますが、この「日」、つまり時間もまた神によって造られたのです。世界は時間と空間で成り立ち、私たちはその中でしか生きられません、時間と空間を造られた神は時間や空間を超えて、物事をなさることが出来ます。そのことはイエスがなされた奇蹟に見ることが出来ます。

この世界に永遠のものはなく、人間もまた、永遠ではないのに、人間は永遠を感じ、それにあこがれます。それは神が「人の心に永遠への思いを与えられ」たからです（伝道者の書 3:11）。永遠なものなど何も体験していないのに、人が永遠を思うことができるというのは、永遠なる神がおられることの証拠のひとつなのです。

永遠の神はご自分を「わたしは有って有る者」と呼ばれました。それが「主」（アドナイ・ヤーウエ）という神のお名前となりました。神だけが「有って有る」お方です。世界も、私たち人間も、「有って無きがごとき」ものです。世界は神によって造られ、支えられています。私たちひとりひとりも自分の力で生きているのではなく、神に生かされているのです。神がその支えの手、

守りの手を引っ込められたら、世界も、私たちも、たちまち消え去ってしまいます。

ですから聖書は、移り変わるものではなく、いつまでも変わらない永遠の神を見上げ、この神に信頼して生きるようにと教えるのです。「山々が生まれる前から、あなたが地と世界とを生み出す前から、まことに、とこしえからとこしえまであなたは神です。」（詩篇 90:2）

「あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。」（イザヤ 40:28）

ところが、私たちは、神を忘れて、頼りにならない自分に頼ったり、人に頼ったり、また、まわりの状況に頼ったりして、ものごとがうまくいけなくなり、失望を繰り返しています。この世のものだけでなく、それらすべてを創造された神を見上げましょう。あらゆるものの先におられる永遠の神の御手に信頼するとき、私たちは失望や落胆から立ち上がることができます。新聖歌 315 「主の御手に頼る日は」という賛美に「頼れ、頼れ、とこしえの御手に。頼れ、頼れ、さらば恐れあらし」と歌われている通りです。

二、全知全能の神

さて、創世記では、世界の創造が6日の枠組みの中で描かれています。「神が6日で世界を創造された」と聞くと、多くの方は、「6日で世界ができるわけがない」と言うでしょう。しかし「ビッグバン説」では、宇宙は一瞬

にしてできたことになっています。宇宙は138億年前、高密度な塊であった。それが爆発して現在の宇宙ができたというのです。神の創造を認めない人たちでさえ、宇宙が一瞬にして始まった可能性を信じているのなら、全能の神が一瞬にして世界を創造なさっても不思議ではないのです。しかし、神は、世界を一瞬ではなく6日かけてお造りになりました。この6日というのは、神が人に与えてくださった労働の期間で、7日のうち6日働き、1日は休むことを、神ご自身が守られたのです。一瞬にして世界を造ることができた神が、そのために6日もかけたということは、神がいかにかこの世界を心を込めて造られたかを示しています。

この創造の6日を見ていくと、第1日から第3日と第4日から第6日が対比していることが分かります。第1日には「光」が造られ、第4日目には、地球に光を届ける太陽、月、星が天に配置されたとあります。第2日には大空と海が分かち、第5日目には海の生き物と空飛ぶ鳥が造られました。第3日目は陸と海とが分かち、第6日には陸に住む生き物が造られ、最後に人間が造られました。最初の3日に骨組みが造られ、次の3日にそれを満たすものが造られています。

ちょうど家を建てるときに、最初にフローア・プランが描かれ、次に設計図が引かれ、それから骨組みが造られて、それぞれの部屋が区切られていくのに似ています。それぞれの部屋の区分ができてから、リビング、キッチン、またベッドルームと、それぞれの部屋がそれ

にふさわしく作られていき、冷暖房などの設備が取り付けられ、家具が運び込まれます。すべてができあがってから人が住んで、はじめて家が家となります。神が世界を造られたときも、同じで、神はこの世界をその知恵をもって設計し、それに従って、順序正しく造っていかれました。進化論者が言うように、世界が偶然と偶然とが積み重なってできたものではないのです。

ある天文学者が太陽系の模型を作りました。太陽が中心にあって、水星、金星、地球、火星、木星などの順に並んで、太陽のまわりを回るようにできていました。そこにこの学者の友人がやってきて、「すごい模型じゃないか、君が作ったのかい」と訊きました。この友人は神の創造を信じようとしなかった人だったので、この学者はわざと「僕じゃないよ、偶然できたんだ」と答えました。すると友人はこう言いました。「ばかなことを言うんじゃない、こんな精巧なものが偶然できるわけがないじゃないか。それに、君のように天体の知識がなければ、こんなものは作れるわけがない。」それに対して学者はこう言いました。「君は、この太陽系の模型が、偶然ではなく、知性によって作られたと認めるんだね。それなら、この模型よりももっと精巧な本物の太陽系が、神の知恵によって造られたことをどうして認めないのかね。」

その通りです。科学者たちは世界とそこにある現象を調べるのに知性を高度に働かせ、そこから一定の法則を見出し、それを利用しようとします。もし世界が偶然の

積み重ねであるなら、そこに法則を見出すことはできません。世界が創造者の知恵を反映するものでなければ、科学者たちの知性は何も見つけることができず、どんな科学も成り立たないのです。しかし、実際は違います。この世界には神の設計の痕跡があります。神が造られた世界は、神の知恵、力、また、そのお心を示しています。聖書に「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す」（詩篇 19:1-2）とある通りです。

三、愛と恵みの神

神が世界を6日で造られたことは神の人に対する愛と恵みを示しています。創造の6日を実際に見た人は誰もいません。最初の人間アダムは、創造の6日目の最後に造られましたから、アダムが見たのはすべてが見事に造られた世界でした。ところが、私たちが創造の6日の記述を読んでもみると、あたかもそこに自分がいて、神のみわざを見ているかのように感じます。聖書は創造をたんなる自然現象としてではなく、それを人間のためになされたこととして描いているのです。まるで、神が、人間に、「わたしが6日の間にしたすべてのことは、みな、あなたのためだったのだ」と言っておられるかのようなようです。実際、神は人が生きるのに必要なすべてを整えてから人を造っておられます。そして、神はアダムとエバを祝福して言われました。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」（創世記 1:28）神はこの世界をアダムとエバ、そ

して、ふたりから生まれる人類のために造ってくださったのです。

創世記 1:31 に「そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった」とあるように神が造られた世界は、神がそれをごらんになって満足なさるほどにすばらしいものでした。しかし、人間は、神がお与えくださった良い物は欲しいが、神は要らないといって、神を斥けて生きるようになりました。しかし、神から離れては、たとえ全世界を手に入れても、そこにほんとうの幸せはありません。神はこの世界を人のために造られるほどに、人を愛してくださいました。その神の愛を知り、その恵みに感謝して生きるところにほんとうの喜び、満足があります。神の愛と恵みこそ何物にもまさって尊いものです。神の愛を知って、その恵みに感謝して生きるところに人生の幸いがあります。それでイエスは言われました。「人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましよう。そのいのちを買い戻すのには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」（マタイ 16:26）イエスが言われた「まことのいのち」とは、イエス・キリストを信じて与えられる永遠のいのちのことです。この永遠のいのちを受けてはじめて、私たちは神の愛と恵みに生きることができるようになるのです。

神は世界の初めからおられた永遠の神です。神は世界を創造された知恵と力の神です。神は、私たち人間を愛してこの世界を造り、それを与えてくださった恵みの神

です。いや、全世界よりもはるかに尊い、ご自分の御子キリストさえもお与えくださいました。神はそれほどに、私たち一人ひとりを愛しておられます。この神が、聖書によって私たちに語りかけ、呼びかけ、私たちを幸いな人生へ招いてくださっています。その招きに信仰と信頼をもってお応えしましょう。

(祈り)

すべてのものの造り主である神さま、今朝、あなたの創造のみわざを通して、あなたの愛と恵みを教えてください、ありがとうございます。あなたは世界を造られたとき「日」を造られました。私たちが地上に生み出されたとき、私たちの人生の日々も、あなたが造ってくださいました。あなたの愛と恵みを知って、あなたが私たちに与えてくださった日々を力強く歩むことができるよう、導いてください。イエス・キリストのお名前です。

人とは何者なのでしょう

創世記 2:4-9

2:4 これは天と地が創造されたときの経緯である。神である主が地と天を造られたとき、

2:5 地には、まだ一本の野の灌木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。それは、神である主が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである。

2:6 ただ、霧が地から立ち上り、土地の全面を潤していた。

2:7 その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

2:8 神である主は、東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。

2:9 神である主は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木とを生えさせた。

詩篇 8:4 に「人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは」とあります。「人とは、何者なのでしょう。」人々はこの問いの答を捜し求めています。「自分が何者か」を知って、確信ある人生を送りたいと願っています。しかし、それに答えることができるのは、人を造られた神の他ありません。そして神は、その答を聖書に示しておられます。

一、神に生かされている者

人とは何者なのでしょう。聖書は、まず、第一に人は神によって造られ、神によって生かされている存在であると教えています。創世記 2:7 はこう言います。「その

後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。」人が「土地のちり」から造られたというのはほんとうです。人は死ねばそのからだはさまざまな元素に分解され土に帰っていき、その成分のほとんどは土にあるものと同じです。人の体の70パーセント以上は水です。他に石鹼を一個作れるぐらいの脂肪、釘数本分の鉄分、マッチ数本分のリンなどがあるだけです。ある人が、人間のからだを元素に還元したらどれぐらいの値段になるか計算したそうですが、せいぜい10ドルぐらいにしかならなかったそうです。

けれども、私たちの値打ちがたった10ドルだけでないことは誰もが知っています。人の生命は何よりも尊いもので、この生命は神によって与えられたものです。「主は…その鼻にいのちの息を吹き込まれた」とある通りです。

このことは、人間は神によって生かされ、神に依存して生きている者であることを教えています。「人」（アダム）という言葉は、「土」（アダマ）から来ています。聖書は、私たちが「土」（アダマ）から造られた「アダムの子」であることを忘れてはならないと戒めています。神は罪を犯したアダムに言われました。「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」（創世記3:19）詩篇もこう言っています。「あなたは人をちりに帰

らせて言われます。『人の子らよ、帰れ。』」（詩篇90:3）

多くの人は自分が神に生かされていることを忘れていきます。神に信頼するより、自分と自分が持っている物に頼っています。イエスが譬話で話された金持ちがそうでした。豊作で穀物倉に入りきらないほどの収穫があったとき、彼は心の中でこう言いました。「どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。」しばらく考えましたが、すぐに気がついて言いました。「どうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。」そして、こう言いました。「そして、自分のたましいにこう言おう。『たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』」すると神は彼に言われました。「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。」（ルカ12:16-20）この金持ちは、人間的な基準では決して「愚か」ではありませんでした。その才能と努力によって田畑をよく経営したので大きな収穫を得たのでしょう。しかし、彼は、自分が神に生かされていることを忘れてしまっていました。彼は自分に向かって「これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ」と言いましたが、彼は自分の財産が自分を生かしていると思い込み、人を生かしておられる神に信頼しなかったのです。それこそが、神の目から

見て、いちばん「愚か」なことなのです。

詩篇 90 篇は人生が短く労苦に満ちていることを嘆いています。それだけで終わらず、「それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください」（12 節）との祈りに導かれています。ほんとうに知恵ある生き方とは、人生の日々を支えてくださっているのは神であることを知って、神に信頼することにあるのです。詩篇 90 篇はこう閉じられています。「私たちの神、主のご慈愛が私たちの上にありますように。そして、私たちの手のわざを確かなものにしてください。どうか、私たちの手のわざを確かなものにしてください。」（19 節）神が私たち一人ひとりを創造し、生かし、支えておられることを知って、神に信頼するとき、私たちは確かな人生を生き、人生を喜び楽しむことができます。さらに、意味あることを成し遂げ、神のために成したことの報いを天で受けることができるのです。

二、神のかたちを持つ者

聖書は、第二に人が「神のかたち」に造られたと教えています。創世記 1:26-27 に「そして神は、『われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう』と仰せられた。神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」とあります。この「神のかたち」というのは、人のからだ

の姿かたちではありません。人の内面、「霊」、「たましい」、「人格」と呼ばれている部分のことです。人（アダム）は土（アダマ）から造られました。しかし、からだは地上のものであっても霊は天のものなのです。

「神のかたち」を理解するために、創造の6日間をふりかえてみましょう。第3日目に神は地に植物を生じさせました。創世記 1:12 は「それで、地は植物、おのおのその種類にしたがって種を生じる草、おのおのその種類にしたがって、その中に種のある実を結ぶ木を生じた。神は見て、それをよしとされた」と書いています。第5日目には海の生き物と空を飛ぶ鳥とを造られました。創世記 1:21 に「それで神は、海の巨獣と、その種類にしたがって、水に群がりうごめくすべての生き物と、その種類にしたがって、翼のあるすべての鳥を創造された。神は見て、それをよしとされた」とあります。第6日には地に住むさまざまな動物を造られました。創世記 1:25 に「神は、その種類にしたがって野の獣、その種類にしたがって家畜、その種類にしたがって地のすべてのほうものを造られた。神は見て、それをよしとされた」とあります。もう、お気づきになったでしょう。動物も植物もあらゆる生き物は「種類にしたがって」造られています。ところが、人間については「種類にしたがって」ではなく、「神のかたち」に造られたと言われているのです。

「種類にしたがって」というのは、神がそれぞれの動植物についての原型を持っておられ、それぞれが、その原型にしたがって造られたということです。犬は犬、猫は

猫として、それぞれにデザインされ、設計されて、造られました。分類学では人は「ホモ・サピエンス種」に属すると言われます。しかし、聖書によれば、人は「ホモ・サピエンス種」という「種類にしたがって」ではなく、「神のかたち」に造られました。他の生き物はそれぞれの原型にしたがって造られましたが、人の「原型」は、なんと、神ご自身でした。人は神を原型にして、神になぞらえて造られたのです。

「かたち」というのは目に見えないものを目に見えるように表すものです。神は人を「神のかたち」に造ることによって、人に目に見えない神を目に見えるように表わすという役割をお与えになったのです。つまり人は、この世界に対する神の代理人、representativeとして造られたのです。Representative といえばアメリカでは下院議員のことですが、国民を代表する榮譽ある立場で、その務めを果たすためにさまざまな特権が与えられています。同じように、神も人に「地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ」（創世記 1:28）と言われて、神が持つておられる支配権を委ねておられます。

神は神の民に偶像をかたく禁じられました。「あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない」（申命記 5:8）といった言葉が聖書のいたるところにあります。偶像が禁じられているのは、神は地上のあらゆるも

のを越えた、いと高きお方であって、地上のどんなものも神を表すことができないからです。ところが、「どんなかたちをも造ってはならない」と言われた神が、人を神を表す者、神のかたちとして造られたというのですから、人がどんなにか特別な存在であるかが分かります。人は土から造られた、もろく、小さなものです。しかし、神はその小さな存在の中にご自分の無限のご性質を封じ込めてくださったのです。それは神のご性質が私たちの存在や生活、また、人生を通して表れ出るためです。神を表す者として生きる、ここに「神のかたち」に造られた人間の生きる目的があり、使命があります。これはまた、神から私たちへのチャレンジでもあるのです。

三、他者とともに生きる者

第三に、人は他の人とともに生きる者として造られました。日本語で「人間」と言うように、人は他の人と関係を持ちながら「人の間」で生きていく存在です。神は最初アダムだけを造られましたが、「人が、ひとりでいるのは良くない」（創世記 2:18）と言われ、人のあばら骨から女をお造りになりました。アダムは彼女を見て「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女（イシャ）と名づけよう。これは男（イシュ）から取られたのだから」と言い、彼女を喜び、妻として迎えました。

「人が、ひとりでいるのは良くない」というのは、アダムの場合、結婚を指していましたが、これは結婚のこと

だけを言っているのではありません。イエスが言われたように生涯独身に定められた人もいますし、配偶者が亡くなったり、離婚したりして「シングル・アゲイン」となる場合もあります。けれども、どの人も、どこかで誰かとつながっています。人は人とのつながりの中で生きていくもの、その中でしか生きていけないものなのです。

神は愛の神であり、人に愛の内に生きることを求めておられますが、愛とは、他の人との間に生まれるもので、誰ともどんな関わりも持たずに孤立しては愛を実践することはできません。創世記 1:27 に「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」とあります。人が他者と関係を持つ者として造られたことと、神のかたちに造られたこととは深く結び合っています。他の人と共に生き、互いに愛し合うことの中に、神のかたちがあると言っているのです。

神は人間をすばらしく造り、この世界の良いものを与えてくださいました。そこに神の愛が表れています。さらに、罪の中に堕ちた人間のために、御子イエス・キリストを与え、人を聖霊によって新しく造り変えてくださいました。そこにはさらに大きな神の愛が示されています。では、神は人を創造されたときから愛することを始められたのでしょうか。いいえ、神は、永遠の先から聖霊の愛をもって御子を愛しておられました。神は永遠から永遠まで愛の神です。「神のかたち」の中には、この

神の永遠の愛が刻み込まれているのです。人間は高度な知性、豊かな感情、また自由な意志など、他の動物が決して持つことができないものを持っています。それらは「神のかたち」の表れですが、そうしたものに勝って神を表すものは愛です。ご利益を得るためではなく、真心から神を愛し、見返りを求めてではなく、損得をこえて他を愛する、そうした愛が「神のかたち」の中で最も尊いものなのです。

「人は何者なのでしょう。」人は土からとられた土の器です。しかし、神はその土の器を「神のかたち」とし、人を神の栄光の器としてくださいました。人は、神の愛の対象です。人には他の人と共に生き、愛によって神を表す使命が与えられています。この神の愛を知り、神の愛を受け入れてください。そして、愛の神を表す器となれるよう、祈り求めましょう。

(祈り)

造り主なる神さま、私たちは自分が何者なのかが分かるときはじめて、何のために、どう生きていいかが分かります。私たちはあなたに愛され、あなたの愛を表すために造られました。そして、そのことができるため、あなたは御子イエスを救い主として私たちに与えてくださいました。この救い主によって、私たちは愛に生きる人生を歩むことができ、それによって、「神のかたち」としての使命を果たすことができます。私たちをそのような者としてください。イエス・キリストのお名前です。祈ります。

そよ風の吹くころ

創世記 3:8-12

3:8 そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間身身を隠した。

3:9 神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」

3:10 彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」

3:11 すると、仰せになった。「あなたが裸であることを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。」

3:12 人は言った。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」

一、自己との断絶

「創世記」は、その名前の通り、あらゆるものの「はじまり」を語っています。私たちはすでに、「世界のはじまり」と「人間のはじまり」を見てきました。きょうは、「罪のはじまり」を見ます。

神はこの世界を素晴らしく造られました。「そのようにして神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった」（創世記 1:31）とあるように、世界は良いもので満ちていました。ところが、そこに罪が入ってきました。アダムとエバは神の言葉に従わず、エデンの園にあった祝福を失い、自らを不幸にしました。エデンの園での幸いな期間はごくわずかでした。創世記は、はやくも3章で、罪がこの世界に入っ

たことを告げています。

罪は、あきらかに人間の選択であり、神への不従順なのですが、多くの方は、罪を人間に備わった本能のせいにしてます。「人間には他の動物のように、生存を保ち、子孫を残すという本能がある。法律や道徳でそれらを抑えようとするのは無理がある。`罪、といっても、それは人間の本能なので、罪を犯すのはしょうがない。しかもその本能を与えたのは神である」と言うのですが、そうでしょうか。いいえ、人間は罪を犯すとき「本能」といわれるものにさえ従っていません。たとえば、ライオンは他の動物を餌食にしますが、満腹したら、どんなに他の動物が近づいてきても、それに手を出しません。ところが、人間は満足することを知らないのです。ヒトラーなどの独裁者たちは、何百万人も人を殺し、他の国々を自分のものにしようとしてきました。一般の人でも、必要以上のものをむさぼり、それを人から奪いとうとします。それは本能から出たことではありません。神はそのような本能を人間に与えはしませんでした。それは本能をこえたむさぼりであり、罪です。よく、罪を犯す人を「本能だけで生きる動物のようだ」と言いますが、実際は本能に従って生きている動物以下のものになっているのです。

また、「神は人間に罪を犯させないようにすればよかったのだ」という反論もよく聞きます。けれども、それでは、人間はロボットになってしまい、自由な意志を持った者、「神のかたち」でなくなります。神は、人間

を愛の対象として造られました。神が人を愛し、人がその愛にこたえて神を愛するという愛の関係を人間と結ばれたのです。「愛」は強制されるものではありません。強制されたらそれは愛で無くなってしまいます。ですから神は人間に自由な意志を与え、それによって神を愛し、他を愛する者としてくださったのです。神を愛することも神を憎むこともできる自由、また神に従うことも従わないこともできる自由があって、その中で神を愛し、神に従うことを選ぶ。それが、神が人に求めておられる神への「愛」であり「信仰」です。

神は、アダムとエバにひとつの命令を与えることによって、彼らに神を愛し、神に従うことを学ばせようとなさいました。それは、決して難しいものでも、不合理なものでもありませんでした。エデンの園にある「善悪の知識の木」からその実を取って食べてはいけないという命令でした（創世記 2:16-17）。もし、エデンの園にその木しかなく、それを「食べるな」と言われたとしたら、その命令は、厳しく、不合理なものですが、神は、エデンの園に食べるのによい木の実をふんだんに実らせ「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい」と言ってくださったのです。しかも、この「善悪の知識の木」も、将来にわたって禁じられていたのではなく、やがて時が来れば、与えられたことだろうと思われまます。まだ造られて日の浅いアダムとエバに神は順をおってご自分を知らせ、物事を学ばせようとなさいました。

箴言 1:7に「主を恐れることは知識の初めである」とあるように、人はまず神を知り、神を愛し、神に従うことを学ばなければなりません。「神を教えない教育は賢い悪魔を作るだけだ」という言葉がありますが、神は、アダムとエバに、まず、神に従うことを学ばせようとなさったのです。そして、神に従うとは具体的には神のことばを守ることです。ところが、彼らは神のことばを守りませんでした。。

その結果、人間は、本来の自分とは違ったものになってしまいました。罪は「断絶」であると言われますが、その断絶の第一のものは、本来の自分と、実際の自分とが断絶していることです。自分はいこうあるべきなのに、実際にはそのようではない。こうすべきなのに、それができない。そのためにいつも心に葛藤があつて、それが自分を苦しめる。人は、罪のゆえに、自分自身の中にある断絶に苦しむようになりました。

二、神との断絶

罪は、第二に「神との断絶」をもたらします。きょうの箇所8節にアダムとエバは「そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた」とあります。エデンの園で「そよ風の吹くころ」が一日のうち何時ごろだったか分かりませんが、おそらく、一日の労働が終わり、まだ日が沈む前、夕方涼しい風が吹くころだったと思います。その時、神と人との語り合いの時がもたれていたのでしょう。彼らは一日の働きを神に報告し、神はそれを聞いてねぎらい、次の日のために、二人

に知識を授け、指示を与えてくださったことでしょう。

ところが、罪を犯したとき、この神との語り合いが亡くなりました。アダムとエバは、身を隠そうとしましたが、誰も神から隠れることはできません。詩篇 11:4 に「主は、その聖座が宮にあり、主は、その王座が天にある。その目は見通し、そのまぶたは、人の子らを調べる」、詩篇 139:7 に「私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう」とある通りです。

また、彼らは神の顔を避けましたが、これは人が神のみ顔を仰ぎ求めて生かされる存在であることに、全く逆らったことでした。詩篇 27:8 には「あなたに代わって、私の心は申します。『わたしの顔を、慕い求めよ』と。主よ。あなたの御顔を私は慕い求めます」とあります。神は私たちに御顔を向け、私たちに御自身を表そうとしておられます。人のたましいが求めてやまないものは、この神の御顔です。そうであるのに、神に背を向け、神から隠れようとし、神から遠ざかろうとする。ここに罪がもたらす最大の不幸があります。罪は私たちを神から引き離します。私たちを生かしておられる生ける神から離れたなら、そこあるのは死だけです。罪は、私たちを神の御顔の光から遠ざけます。私たちを照らす恵みの光、祝福の光がなくなれば、そこにあるのは、暗闇だけです。

罪への誘惑は耳障りのよい言葉、甘いささやきで始まり、最後は、神の言葉を否定して終わるのです。いま

す。誘惑の言葉はこうでした。「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」（創世記 3:5）「あなたはもっと賢くなれる。神のようになれる。神は、人間が神のような知恵と知識を持つようになり、神の競争相手になることを恐れて、善悪を知る木の実を食べることを禁じたのだ」と言っています。偉大な神を人間のレベルに引き下げ、人間を神のレベルに上らせようとしてしました。そして、「それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」（創世記 2:17）との神のことばを、「あなたがたは決して死にません」（創世記 3:4）と言って、否定しました。神の言葉の否定は、神と人との絆を断ち切ってしまう恐ろしいものです。私たちは、私たちが神から引き離そうとする巧妙な誘惑に乗せられてはなりません。そのためにも、どんなことがあっても、神の言葉を守り通す決意と信仰が必要です。

三、人との断絶

第三に、罪は、他の人との断絶をもたらします。アダムの場合は妻との断絶でした。アダムは自分の脇腹の骨から造られた妻を見て、「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉」（創世記 2:23）と言って喜びました。古代のある説教者はこう言っています。「神がエバをアダムの足の骨から造らなかったのは、男が女を卑しめないためである。エバがアダムの頭の骨から造られなかったのは彼女が夫の上に立たないためである。彼女

がアダムの脇腹から造られたのは、アダムが彼女を抱いて護るためである。」これは創世記 2:22-23 の最もすぐれた解釈だと思います。アダムはそのようにエバを愛しました。ところが、アダムが罪を犯したとき、アダムはエバのことをどう呼んだでしょうか。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」（12 節）「この女」と呼んでいます。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉」と呼んだのと大違いです。

しかも、「あなたが私のそばに置かれたこの女」とさえ言いました。「神がこんなろくでもない女を私に与えたので、私は神の命令を守ることができなかつたのです」と言わんばかりです。エバが誘惑に乗ってしまったとはいえ、アダムもその場において、エバと行動を共にしているわけですから、エバを非難するのは筋違いです。アダムはエバを弁護するのが当然なのに、エバに責任をなすりつけています。このように罪は夫と妻との間を切り裂きました。夫と妻からはじまって、親と子、兄弟と兄弟、親族と親族に断絶をもたらしました。この断絶はアダム以来、今日まで続いています。どんなに多くの家庭が、互いにいがみあって壊れていき、隣人と隣人とが警戒しあい、国と国とが争い続けてきたことでしょうか。罪は、神の愛を見えなくさせ、人から神への愛を奪いとるだけでなく、人と人との愛をも壊してしまうのです。そしてそれは時代が経てば経つほど、どんどん悪くなっており、私たちはその現実を見えています。

四、断絶からの回復

これらの断絶は回復するのでしょうか。回復します。なぜなら、神がそれを望んでおられるからです。神は、アダムが罪を犯して、エデンの園の木々の間に身を隠したときも、神は、人に呼びかけ、「あなたは、どこにいるのか」（9節）と呼び続けられました。神はアダムが罪を犯した瞬間に彼に死を与えることもできました。神はアダムに「それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」と言っておられたのですから、その言葉どおりになさっても良かったのです。しかし、神は、アダムを惜しみ、「あなたは、どこにいるのか」と言って、アダムを捜し求められました。

神がアダムを捜し求められたといっても、もちろん、神はアダムのいるところをご存知でした。神が「あなたは、どこにいるのか」と言われたのは、神がアダムを見つけられなかったためではありません。これは、「あなたは、どこにいるのか。なぜ、わたしのもとから離れて身を隠すのか」という、アダムへの呼びかけでした。アダムに在るべきところに立ち返るようにとの招きの言葉だったのです。神が、罪を犯した者に悔い改めて神に立ち返るよう呼びかけておられる言葉は、聖書の初めから終わりまで、何度も何度も出てきます。放蕩息子の譬に出てくる弟息子は、ブタの餌さえ食べたいと思うほどに落ちぶれ果てたとき、はじめて、自分はここにいるべきではないと気付きました。そのように、神はアダムにも、在るべきところでないところにいることに気づか

せ、そこから神に立ち返ることを願っておられたのです。

神は、アダムとエバが罪を犯したときから、罪からの救いを約束されました。イエス・キリストはその救いの約束を成就し、「人の子は、失われた人を捜し出して救うために来たのです」（ルカ 19:10）仰って、今も、私たちを神のもとへと招いておられます。その招きに答え、イエス・キリストを信じるなら、私たちはあるべき姿と現実の姿の断絶は回復します。人と人との断絶も癒やされます。なによりも、神との交わりが取り戻されるのです。そよ風の吹くころ、人が神と語り合った、あの美しい時がもう一度私たちのものとなるのです。「あなたはどこにいるのか。」この招きに「私はここにいます。あなたの御顔を求めます。御声に耳を傾けます」とお答えしましょう。そして、神の御顔を仰ぎ、御声を聞き、主とともに人生の日々を歩む幸いを取り戻しましょう。

（祈り）

主なる神さま、きょうは「罪のはじまり」を学びましたが、それは同時に、救いへの招きのはじまりでもあることを知りました。あなたがどんなにか私たちの救いを願い、罪による断絶を回復し、私たちをそこから癒そうとしておられるかを思い、心から感謝します。常にあなたのもとに立ち返り、あなたとの交わりの恵みに与る私たちとしてください。イエス・キリストのお名前です。

福音のはじめ 創世記 3:13-15

3:13 そこで、神である主は女に仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。」女は答えた。「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです。」

3:14 神である主は蛇に仰せられた。「おまえが、こんな事をしたので、おまえは、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりものろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない。

3:15 わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」

皆さんは「責任転嫁」という言葉をご存知ですね。「転嫁」の「転」は、「運転」の「転」です。「転がす」、「動かす」、「移動させる」などといった意味があります。「転校」や「転職」というときにも使います。「転嫁」の「嫁」は「嫁」という字で、「嫁がせる」という意味で使われています。女性が実家を離れて他の家の人となることを表しています。古くは、夫が亡くなったりして、別の人と結婚するようになり、嫁ぎ先が変わることを「転嫁」と言いました。「転嫁」は「再婚」のことだったのです。しかし、「責任転嫁」となると、結婚のようにめでたい話ではなくなります。ほんとうは自分が負わなければならない責任を別の人になすりつけるという、卑劣なことだからです。皆さんも人の失敗を自分のせいにされてつらい思いをしたことがあるかと思います。

一、誘惑

「責任転嫁」という言葉がいつごろから使われるようになったかは分かりませんが、「責任転嫁」は、なんと人類のはじめからありました。アダムは自分の罪をエバのせいにし、エバはそれを蛇のせいにしました。そのことをエバへの誘惑のことを書いてある 3:1 から読んでみましょう。

誘惑の言葉は「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか」（1節）といなっています。誘惑する者は、神の言葉をいきなり否定したりしません。「神は、ほんとうに言われたのですか」と、まず、疑いをいだかせます。エバはそれに答えて言いました。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ』と仰せになりました。」（2-3節）エバは、神が「あなたがたが死ぬといけないからだ」と言われたと言っていますが、実際は「それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」（創世記 2:17）と神は言われたのです。「死ぬといけないからだ」というのは「もしかしたら死ぬかもしれない、死なないかもしれない」という意味ですから、「必ず死ぬ」とは大違いです。エバは、神の言葉を知っていました。しかし、神の言葉を正確に理解していなかったのです。誘惑はそうした生半可な知識から入り込んできます。

エバが神の言葉にあやふやな態度を示すと、誘惑する者は、すかさず、「あなたがたは決して死にません」（4節）と、神の言葉を否定しました。それは嘘、偽りなのですが、その嘘、偽りがあまりにもはっきりと、確信をもって語られると、人は、真理よりも偽りを信じてしまいやすいのです。

現代、いたるところで詐欺が横行しています。善良な人ほど騙されやすいので、詐欺の被害にあった人には、本当に気の毒に思います。けれどもアダムとエバの場合は、善良であったのに騙されたというだけではありませんでした。6節に「そこで、女が見ると、その木は食べるのに良さそうで、目に慕わしく、またその木は賢くしてくれそうで好ましかった。それで、女はその実を取って食べ、ともにいた夫にも与えたので、夫も食べた」とあります。「そこで、女が見ると…」とあるように、食べてはいけないと言われた木の実が見た目もよく、おいしそうだったから、そして、なによりも、それによって自分が賢くなれると考えました。それはエバの主観です。自分の目で見た感覚から来る想像や、願望によって判断し、行動したのです。ヨハネ第一 2:16に「すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出たものではなく、世から出たものだからです」とありますが、この「目の欲」とは、エバがしたようなことを指していると思われます。

「頭の上を鳥が飛ぶのは防げない。しかし、自分の頭に鳥が巣を作ることは防ぐことができる。」これはよく言

われる言葉です。この世は様々な誘惑で満ちています。誘惑は誰にでもやってきますが、誘惑はそれを拒否することができます。ものごとを自分の目で見ただけで判断するのではなく、神の言葉に聞き、それに従うことによってできるようになります。神の言葉に聞くこと、正しく理解すること、それを守り、それに従うことがどんなに大切かを、この箇所は教えています。誘惑する者は、「神に従っても善いことは何もない。こうしたらもっと善いものを手に入れられる。それによって満足できる」と、甘くささやきかけてきます。私たちはみな、自分が思っている以上に、そうした言葉に弱く、騙されやすいのです。「自分は大丈夫」などと思うことなく、神に助けを求めましょう。神の言葉に堅く立って、誘惑の言葉を斥けていきましょう。

二、責任転嫁

さて、最初に話した「責任転嫁」ですが、神がアダムに「あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか」（11節）と言われたとき、アダムは「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです」（12節）と答えました。「私は木の実を取りはしませんでした。もらったものを食べただけです」と言い訳をしています。この言い訳は通りません。6節には「それで、女はその実を取って食べ、ともにいた夫にも与えたので、夫も食べた」とあって、アダムは終始エバと一緒にいた事が分かります。エバへの誘惑は同時にアダムへの誘惑でもあつ

たのです。実際、誘惑する者は、「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」「あなたがたは決して死にません。それを食べるそのとき、目が開かれて、あなたがたが神のようになって善悪を知る者となることを、神は知っているのです」と、「あなた」ではなく「あなたがた」と、二人に言っています。エバだけでなくアダムもまた、神の言葉を捨て、誘惑の言葉を選んだのです。

アダムがエバに責任転嫁したので、神はエバにも「あなたは、いったいなんということをしたのか」（13節）と言われました。すると、エバもまた「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです」と言って、自分の罪を蛇に転嫁しました。アダムもエバも、神にその罪を問われたときに、それを自分の非、自分の罪として認めず、次々と責任を転嫁していきました。にもかかわらず、神は蛇に向かって刑罰を宣告しておられます（14節）。

神は、アダムとエバには「あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか」、「あなたは、いったいなんということをしたのか」と問いかけて、申し開きの機会を与えておられますが、蛇に対しては、即座に裁きを与えておられます。蛇の姿で現れ、人を誘惑した悪魔にはどんな申し立ても許されていないからです。悪魔はすでに裁かれていて、もう悔い改める余地は残されていません。救われることはないのです。しかし、人間は違います。本気になって悔い改めるなら、赦

され、救われるのです。人はどんなにひどく墮落したとしても、なお、そこから悔い改めて神に立ち返る余地が、あわれみによって残されています。実際神は、忍耐をもって、人々の悔い改めるのを待ち続けておられるのです。

そして神は悔い改める者を救うため救い主を約束されました。創世記 3:15 は「原福音」（Proto Gospel）と呼ばれ、聖書にある最初の救いの約束です。アダムとエバが犯した罪は「原罪」（Original Sin）と呼ばれますが、神は、人が罪を犯したその時、すぐに、この「原罪」を解決する「原福音」を備えてくださったのです。

三、女の子孫

この箇所「女の子孫」とは、イエス・キリストのことです。ガラテヤ 4:4 に、こう書かれています。「しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。」創世記の「女の子孫」は、新約では「女から生まれた者」と言い替えられています。人は誰でも母親から生まれます。女から生まれた者」です。しかし、ここで救い主がわざわざ「女から生まれた者」と呼ばれるのは、救い主が、人間となってこの世に生まれることを言っているのです。救い主は、神と人との仲立ちをするものですから、救い主はまことの神であり、同時にまことの人でなければなりません。この条件を満たすお方は、正真正銘の人となられた神の御子イエスのほかありません。

ガラテヤ 4:4 で「また律法の下にある者となさいました」とあるのは、神の御子が神がすべての人間に求めておられる霊的、道徳的な定めの下にお生まれになったことを意味します。ほんとうはイエスこそ人々に律法を与え、国々を治めるべきお方なのです。なのに、イエスが律法の下に置かれました。なぜでしょう。私たちは神がしてはならないということを行ってきました。また、神が私たちに命じておられることを行なわない怠慢の罪も犯してきました。アダム以来、神の律法を破り、行ってこなかったあらゆる罪の責任を負うために律法の下に立たれたのです。アダムは神のことばに不従順でしたが、第二のアダムとなられたイエスは神のことばに従順に生き、律法の要求をすべて満たされました。イエスが「律法の下にある者」となられたのは、私たちが満たすことのできなかつた神の律法を、私たちに代って満たしてくださいるためだったのです。

そのためにイエスは、あの十字架で、全人類の罪を負って死んでゆかれましたのです。アダムがエバに転嫁し、エバが蛇に転嫁した罪を、神は、ご自分のひとり子イエス・キリストに転嫁されたのです。アダム以来の罪と、私たちの犯している罪のすべて、人が自分の罪を認めず、他の人にそれを転嫁し、責任をなすりつけてきたそのすべてを、神は救い主イエスに転嫁し、イエスは進んでそれらをご自分の身に背負ってくださったのです。

「彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく」というのは、イエスの十字架を預言してい

ます。救い主が世に来られたとき、悪魔は救い主を亡きものにしようとし、ついにイエスを十字架に追いやりました。しかし、それは、彼が神の御子にかみついただけのことで、御子イエスは、その死によって死を滅ぼし、その復活によって、悪魔の頭を踏み砕いて徹底的な打撃をお与えになりました。

アダムとエバが罪を犯し、まだそれを悔い改めていない時から、神は人のために救いを備えてくださり、約束してくださいました。創世記には世界のはじまり、人間のはじまり、罪のはじまりが書かれていますが、同時に罪からの救いを告げる福音のはじめもまた、すでに書かれているのです。なんと驚くべきことでしょう。神はそれほどに、人間を愛し、その悔い改めを待ち、救いを望んでおられるのです。

神は聖にして義なるお方です。もし、神が愛とあわれみの神でなければ、私たちは神を怖がることはあっても、罪を悔い改めて、神に近付こうとする心は起こってこないでしょう。神が愛の神でなければ、私たちは決して自分の罪を言い表そうなどとはせず、数限りなく言い訳を作って自分を守ろうとするでしょう。神が罪人にさえ、あわれみをもって臨み、恵みをもって取り扱ってくださるからこそ、私たちは神に対して素直になり、正直になれます。この愛の神が備えてくださった救い主イエス・キリストを、そのような素直な心で信じ、受け入れましょう。それこそが、神が最も喜ばれることであり、私たちにとって最も幸せなことなのです。イエス・キリ

ストによって罪を赦され、神に愛され、聖霊に守り導かれる生活がそこから始まるのです。この週も、キリストがくださる罪の赦しの恵みの中に歩み続けましょう。

(祈り)

恵み深い神さま。あなたが、どんなにか人を愛し、その救いを願っておられるかを知り、心から感謝します。あなたの愛のお心から出たあなたのお言葉を、しっかり心に留め、あなたの言葉に従って生きる者としてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。

福音と日本文化 ㊦ 一あとがきにかえて

ユダヤの会堂では安息日ごとに聖書が朗読され、会衆はそれを聞いて神の言葉に触れました。誰もが聖書を手にしてそれを読むことができなかった時代には、それが唯一といってよい神の言葉の伝達手段だったのです。教会の礼拝でも聖書の朗読はとても大切な要素で、聖書の朗読に続いて説教がなされました。テモテ第一 4:13 でパウロがテモテに「私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい」と言っているように、それが牧師の中心的な務めでした。

今日では誰もが聖書を手にするので、教会で朗読されるのは聖書のほんの一部でしかなくなり、多くの場合、それはスクリーンに映し出されるようになりました。それで、以前のように座席に聖書や讃美歌を備え付ける教会が少なくなりました。便利といえば便利ですが、聖書そのものを手にして、ページをめくるという作業が省略されることによって、その箇所文脈が失われてしまう危険があります。旧約と新約書簡が朗読され、詩篇が歌われ、福音書が朗読され、そこから説教がなされる伝統的な礼拝形式の良さも見直されています。神の言葉が音声となって会堂に響き渡り、それを耳で聞くということには意味があり、力があります。

ひとりで聖書を読むときも、黙読するだけでなく、朗読もしてみてください。目で読み、口で語り、耳で聞くという三つのことを同時に行うことによって、神の言葉がより一層心に入って来ることでしょう。



Penguin Club
www.penguinclub.net